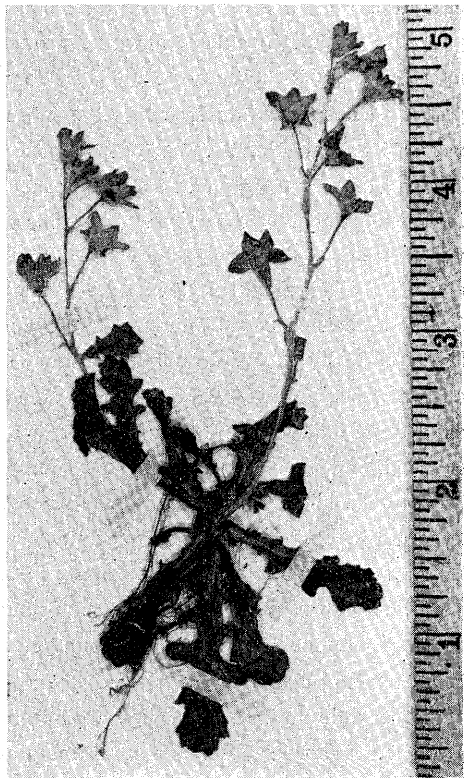


○台湾・琉球の植物補遺 (7) (山崎 敬) Takasi YAMAZAKI: Supplement of the flora of Ryukyu and Formosa (7)

15. ヒメサギゴケ *Mazus yakushimensis* 九州南部から台湾にかけて、トキワハゼに似て全く別種のものが存在する。これは葉の形やロゼットの状態から、台湾北部にあるセイタカサギゴケ *Mazus fauriei* とよく似ていることから一応同種としておいた。しかし花が小さい点が異なるので疑問に思っていたが、資料が充分でなかったものでそのままにすごしていた。最近、屋久島の生品を培養した結果、セイタカサギゴケとは全く別のものであることが明らかになった。また台湾を旅行して明らかになったことは、台湾にもこれがあり、しかも類似種の *M. fauriei* や *M. alpinus* とは生育地域が異なることがわかった。これをヒメサギゴケとよぶことにする。

ヒメサギゴケが *M. fauriei* と異なる点は花が小さくてトキワハゼに似ている以外に、ほふく茎を全くださないことである。花茎が果期にたおれて節から根をだすことはあるが、サギゴケにみられるようなほふく茎はださない。花の形はトキワハゼ *M. pumilus* に近く、全体の形もよく似ているが、葉は基部に集ってロゼットを作り、その中心から花茎をだし、花茎には殆んど葉がつかない。トキワハゼでは葉はロゼットを作るが花茎の基部にも少数の葉がつくのが普通である。しかしヒメサギゴケの花茎にもときに葉がつくのでこれだけでは特徴にならないが、ヒメサギゴケの花序はじぐざぐ状になる傾向があり、がくは白毛が多く、裂片は巾がひろく、花は白色か少し紅紫色がかかるが殆んど白色に近いなども特徴である。以上の特徴からするとヒメサギゴケは上に比較した種よりも、ヒマラヤから西康、雲南に分布する *M. delavayi* Bonati に近縁のものである。後者は花梗が短い点で異なる。

ヒメサギゴケは屋久島では低地の溪側の岩のゴケの中にはえ、サギゴ



*Mazus yakushimensis* (scale inch).

ケヤトキワハゼが田畑の荒地にはえるのとは全くことなる。台湾では北部の低地に *M. fauriei* があり、北部、中部の 1000-2200 m の山地のややしめったがけなどにヒメサギゴケがみられ、2200-2700 m の高地に花が大きく、長いほふく茎をだす *M. alpinus* がはえているようである。学名は杉本順一氏が屋久島から書いた *Mazus yakushimensis* を使うのがよいであろう。ただこの出版形式は有効でないという意見もあるのでくわしく記載しておく。台湾には以上の他にサギゴケ *M. miqueili* Makino, トキワハゼ *M. pumilus* (Burm.) van Steenis, *M. stachydifolius* (Turcz.) Maxim. があるので計 6 種類存在する。

***Mazus yakushimensis*** Sugimoto in Nippon Journ. Bot. 1: 94, t. 20 (1928)  
—*Mazus fauriei* Bonati sensu Yamazaki in Journ. Jap. Bot. 25: 211 (1950)  
pro parte.

Herba biennis. Caulis brevis multifoliifer apice scapifer. Folia radicalia caespitosa numerosa spathulata vel obovato-oblonga apice rotundata basi in petiolum sursum attenuata margine grosse dentata vel subincisa, dentibus apice rotundatis vel crenatis, 2-5 cm longa 1-2 cm lata membranacea supra parce vel subdense adpresse hirtella subtus parce adpresse hirtella vel ad nervos tantum hirtella. Scapus simplex teres adscendens efoliosus 5-15 cm longus plus minusve flexuosus subdense pubescens 5-17 florifer, saepe in fructu divaricatus repens radículas fibrosas emittens. Bractae lanceolatae vel setaceae acuminatae glabrae 1-1.5 mm longae. Pedicelli pubescentes in anthesi 5-7 mm longi in fructu 8-13 mm longi ascendentes. Calyx crateriformis in anthesi 4.5-5.5 mm in fructu 6-7 mm longus scabridus vel puberulus 5-lobatus, lobis deltoideo-ovatis acutis 3-costatis ad costas pubescentibus in anthesi 1.5 mm longis 2 mm latis in fructu 2-2.5 mm longis et latis tubo calycis subaequilongis. Corolla albida 7-10 mm longa bilabiata, tubo calyce subaequilongo vel leviter longiore 4-5 mm longo, labio superiore breve 2-3 mm longo apice bilobato, lobis deltoideo-lanceolatis acuminatis 1-1.5 mm longis, labio antico trilobo 4-5 mm longo, lobo medio superante ovato obtuso, lobis lateralibus late ovalibus, fauce lanato. Stamina 4 didynama, filamentis filiformibus glabris anticis longioribus. Stylus 5-10 mm longus glaber apice bilamellatus, lamellis flabellatis ca. 0.7 mm longis et latis. Capsula globosa calyce inclusa tubo calycem subaequans 3 mm longa 4 mm lata glabra. Semina numerosa minuta sub lente rugosa ellipsoidea 0.5 mm longa 0.3 mm lata.

Hab. Kyushu: Pref. Hyuga, Minaminaka-gun, Agata (T. Nakai et T. Maruyama, Apr. 5, 1948). Pref. Ohsumi, Isl. Yakushima, Miyanoura-gawa

(J. Sugimoto, Mai. 31, 1927, Type in TI), ibidem Nagata alt. 20 m in mossy rock on streamside (T. Yamazaki, Jan. 3, 1963), ibidem cult. in Tokyo, flower white (T. Yamazaki, Jun. 7, 1965). Ryukyu: Isl. Okinawa (Y. Tashiro, Mai. 1887). Formosa: Pref. Taipei; Urai (E. Matuda, Jul. 24, 1918, no. T226), 大屯山 (T. Sato, Oct. 26, 1935, no. 101), 阿玉山 (B. Hayata, Mai. 5, 1916). Pref. Taoyuan; Remogan (B. Hayata, Mai. 7, 1916). Pref. Ilan; 大平山 (Y. Yamamoto, Sept. 1, 1925). Pref. Nan-tow; 溪頭 1300 m (T. Yamazaki, Sept. 2, 1969). Pref. Chia-yi; 阿里山 (G. Nakahara, Nov. 1906. B. Hayata, Apr. 12, 1916), 阿里山-東埔 2200 m (T. Yamazaki, Sept. 9, 1969).

(東京大学理学部植物学教室)

### ○枕の詰物 (小林義雄) Yosio KOBAYASI: Packings of pillow

我々の生活環境が均一化し、廉価で便利な身の廻りの規格品が大量に出まわると、その反面に遠い祖先から受継がれた自然物利用の手づくり品に心惹かれるものである。これは必ずしも我々の郷愁のみではなく、自然物にはそれぞれ棄て難い味があるからである。早い話が、人間一生の 3 分の 1 は御厄介になっている寝具のたぐいである。これがすべて高分子化学の産物のみを材料としたならば、恐らく味気なく、健康にも宜敷いとは言えまい。

ここに奇特な人があり、寝具の改良に真剣に取り組み、先ず枕の詰物から研究をはじめた。昔から頭寒足熱といわれているが、陶枕、木枕、氷枕のたぐいは一般的ではなく、やはり適当な材料を詰物にした枕を科学的に研究して庶民の役に立たせようとの趣旨である。我国で広く用いられているソバ殻は近頃大分払底の由。考えるまでもなく隣国の中国人は寝室には大いに考慮を払っている。そこで香港から、先ず枕の詰物に使用しているものの見本を取寄せた。その奇特な人と申すのは某布団屋さんであり、この材料の鑑定を私のもとに求めて来られたのは薬学の山下泰蔵老である。さてこれを見一見すると豆科植物の小葉か、日本のコミカンソウの小葉を思わせる。説明によれば南支に大量に産し、僅少の芳香もあり、枕には打ってつけの材料という。折柄来訪の久内老の意見をただしたところ大体同意見であり、一応中国植物誌をしらべる必要があるといわれた。しかし次いで山下さんより連絡があり枕に附属した説明書にフランク・エンブリカとある由。これですべて解決した。机上の石井勇義氏 園芸大辞典より次に略記する。

アヌマロク (菴摩勒) 一名油柑 *Phyllanthus emblica* L. (たかとうだい科) 熱帯アジア原産、中国南部、台湾では栽培、観賞用、又は果実を生食又は漬物とし、材を家具材に用いる。葉および樹皮はタンニンを含む。高さ 10 m 余の落葉小喬木、葉は線状長楕円形、鈍頭、長さ 2 cm、花は小輪で黄色。